

【概要版】第14回野菜需給協議会

1 日時：平成23年11月11日（金） 14：00～16：00

2 場所：（独）農畜産業振興機構 北館6階 大会議室

3 議事概要

（1）23年産夏秋野菜の需給・価格の状況について

23年産夏秋野菜の需給・価格の実績について、機構事務局より以下のとおり報告（資料1）

○夏秋キャベツ

9月下旬以降、台風12・15号の影響により入荷量が前年を下回り、価格が前年を上回る場面もあったが、全体としては、入荷量は前年をやや上回り、価格は高値であった前年をかなり下回った。

○たまねぎ

全体的に小玉傾向ではあったが、入荷量は不作であった前年をやや上回り、価格は高値だった前年を大幅に下回った。

○夏だいこん

7月の北海道産の遅れや9月の台風の影響から、入荷量は不作であった前年並みであったが、価格は前年をかなり下回った。

○秋にんじん

10月に台風等降雨の影響を受けたが、入荷量は不作であった前年をかなり上回り、価格は高値であった前年を大幅に下回った。

○夏はくさい

8月までは順調な生育により入荷量は前年を上回り、価格は前年を大幅に下回ったが、9月中旬から10月中旬にかけては長雨や高温の影響を受けたことから、入荷量は前年をかなり下回り、価格は前年を大幅に上回って推移した。

○夏秋レタス

7月以降、8月中旬までは比較的順調な入荷となり、価格も前年を大幅に下回って推移したが、8月下旬以降、降雨等の影響により入荷量が減少し、価格も一時期高騰した。10月は生育が回復し、高値であった前年を大幅に下回って推移した。

○夏秋きゅうり

8月下旬以降の降雨、その後の台風等の影響により入荷量が前年を下回り、価格が前年を上回る場面もあった。期間を通して、価格の変動が激し

かった。

○夏秋トマト

天候不良等により、入荷量が前年を下回り、価格が前年を上回る場面もあったが、全体としては入荷量が前年をかなり上回り、価格は前年をやや下回った。

(2) 23年産秋冬野菜の需給・価格の見通しについて

ア 今後の気象見通し

株式会社応用気象エンジニアリングより、以下のとおり説明（資料2-1）

・今年の秋から冬にかけての天気については、11月・12月は気温が高めで推移するが、1月は低温傾向となる見込みである。

・ラニーニャ現象の発生が認められ、気温変動が大きい場合には、まとまった降雪後の気温上昇による融水や河川・用水路等の増水が、また、強い冬型の気圧配置となれば、日本海側の大雪や太平洋側の少雨・乾燥が心配である。

イ 秋冬野菜の生産・出荷状況について

全国農業協同組合連合会より、以下のとおり説明（資料2-2）

○冬キャベツ

作付面積は、千葉県が前年並み、神奈川県、愛知県がやや増加。生育状況は、千葉県、神奈川県が台風15号の影響などを受けたが回復傾向、愛知県が1週間程度の生育遅れである。出荷開始時期は、千葉県が9月下旬、神奈川県が10月上旬、愛知県が10月中旬であり、既に出荷が開始されている。

○たまねぎ

作付面積は、主産地の北海道がやや減少。生育状況は、北海道の西部地区が概ね不良、東部地区が前年並みになっている。出荷開始時期は、8月上旬であり、既に出荷が開始されている。

○秋冬だいこん

作付面積は、神奈川県がやや増加、千葉県、徳島県が前年並み。生育状況は、概ね順調である。出荷時期は、千葉県が10月中旬、神奈川県、徳島県が11月上旬になる。

○冬にんじん

作付面積は、千葉県、長崎県がわずかに増加となり、愛知県が減少。生育状況は、千葉県、長崎県が順調、愛知県が年明け出荷分で2週間程

度遅れている。出荷開始時期は、千葉県が10月下旬、長崎県が11月上旬、愛知県が11月中旬になる。

○秋冬はくさい

作付面積は、茨城県、兵庫県が前年並み、愛知県が転作により減少。生育状況は、台風15号によるダメージもあるが回復傾向。出荷開始時期は、茨城県、愛知県が11月上旬、兵庫県が11月下旬になる。

○秋冬レタス

作付面積は、茨城県、静岡県、兵庫県が減少、香川県が前年並み。生育状況は、茨城県、静岡県、兵庫県では台風15号の影響は少ないが、香川県が生育不良となっている。出荷時期は、茨城県が9月下旬、静岡県、兵庫県、香川県が10月中旬になり、既に出荷が開始されている。

ウ 秋冬野菜の需給・価格の見通し

野菜需給・価格情報委員会を取りまとめた需給・価格の見通しについて、同委員会座長である藤島委員より以下のとおり報告（資料2-2）

○冬キャベツ

- ・作付面積は前年をやや上回り、生育状況も概ね順調である。出荷量は少なかった前年をかなり大きく上回り、平年を上回る見込みである。
- ・その結果として、価格は、前年を下回る見込みであるが、年内の生育が前進した場合は、年明け以降、価格が前年を上回る可能性がある。

○たまねぎ

- ・作付面積は、北海道の一部地域で雹害による廃耕があり前年をやや下回り、出荷量は生育が不作だった前年をやや上回るものの、平年との比較では大幅に下回る見込み。
- ・その結果として、価格は前年を下回るものの、平年比では上回る見込み。

○秋冬だいこん

- ・作付面積は、前年をわずかに下回る見込みであり、生育状況は概ね順調である。出荷量は、前年、平年ともに上回る見込み。
- ・その結果として、価格は、前年を下回る見込みであるが、年内の生育が前進した場合は、年明け以降、価格が前年を上回る可能性がある。

○冬にんじん

- ・作付面積は、前年並みとなり、生育状況は概ね順調である。出荷量は、前年、平年ともに上回る見込み。
- ・その結果として、価格は、高かった前年を大きく下回り、平年並みとなる見込み。なお、加工・業務用野菜の国産回帰の動きも見られる。

○冬はくさい

- ・作付面積は、前年並みとなり、生育状況は10月の好天により台風の影響から回復する見込みである。出荷量は、前年、平年ともの上回る見込み。
- ・その結果として、価格は、今後の天候にもよるが、前年をやや下回る見込みであるが、気温が高めに推移すれば、需要の減少と出荷量の増加から、さらに下落する可能性がある。

○冬レタス

- ・作付面積は、前年をわずかに下回る見込みであり、生育状況は概ね順調である。出荷量は、前年をやや上回り、平年をわずかに上回る見込みであるが、1～2月には平年を下回ることもある。
- ・その結果として、価格は、前年並みとなる見込みであるが、1月から2月にかけては出荷量が減少し、価格が平年を上回る可能性がある。

○秋冬野菜等の全体の消費動向について

『景気、天候などの要因による消費動向』

- ・景気が低迷しており、消費は減退傾向にあり、今年の秋は例年より気温が高いため、きのこやはくさい等鍋食材の需要が弱く、逆にレタス、きゅうり、トマト等サラダ食材の需要が依然として順調である。

『震災、原発事故の影響による消費動向』

- ・原発事故に伴う消費減退は、徐々に薄れてきている。
- ・ただし、きのこ等の新たな放射性物質の検出や、ホットスポットの報道がされると、関係する県の幅広い品目も敬遠される場合がある。特に、食の安全性への関心が高い学校給食や子供を持つ主婦から敬遠されることがある。

『野菜全体の販売状況』

- ・消費者が購入しやすい価格帯や量目を工夫し、いままで1個売りしていたものを1/2、1/4等カット売りをしたり、複数個の袋売りのものをバラ売りにしたり、大玉だけの品揃えから小玉等複数の規格をそろえるようにしている。なお、カット売りの増加が販売量の減少につながっている。
- ・直売所においては、野菜を加工して中食として提供する取組が盛んになってきている。
- ・消費者の多様な選択に対応するため、同一の品目について複数産地のものを併売している。また、選択できる利便性から、インターネットを利用した通信販売が活発になっている。

『秋冬野菜の消費動向等』

- ・一般家庭においては、キャベツ、はくさい、たまねぎ等で柔らかい品種のものが好まれる傾向となっている。一方、業務用のキャベツにおいては、寒玉系のように堅く巻きのしまった歩留りの良いものが好まれる。
- ・冬場の野菜消費には、蒸し鍋による需要拡大が期待できる。

『野菜の輸入動向』

- ・①中国産野菜へのアレルギーの減少、②国産野菜の価格高騰の頻度が高くなっていることのリスクヘッジとして、一定量を輸入により確保しようとする動き、③アジアに進出した外食産業等におけるアジア全域での原料調達の動き、④円高やデフレの進展等から、輸入量は増加傾向にある。

『その他』

- ・大学進学時や新社会人になる際の一人暮らし等、自炊を始めるタイミングに合わせて食育を行うことが重要である。

エ 主な意見等

【主婦連合会】

- ・今年の夏、はくさいが8分の1カットで販売されており驚いた。1玉換算にすると1,800円から2,900円程度になり、非常に高かった。
- ・食育は小学校、中学校で行うだけでなく、若い世代を対象に行う必要がある。高齢になるとお弁当やレトルト等の既成食品を食べる傾向にあるので、若い時にスキルを高めると高齢になっても工夫をして野菜を食べるのではないか。

【消費科学連合会】

- ・ばら売りやカット売りは便利で、高齢化社会に向いていると思うが、これによって販売量が減少するのではないかと心配。

(3) 野菜の消費拡大活動等について

野菜の消費拡大に向けた取組みについて、各会員団体より以下のとおり報告（資料3）

【全国農業協同組合連合会】

- ・4月から9月まで毎週1回、JAビル前で、被災地の青果物の即売と被災県の商品を使った弁当の販売を行った。
- ・6月から9月にかけて文化放送本社前の広場で、被災県の青果物の販売と青果物の機能性のPRを行った。
- ・8月21日に宮城県亘理町の仮設住宅で、キャベツとはくさいの無償

配布を行った。

- ・ 8月27日にららぽーとTOKYO-BAYで、「野菜の日」関連のイベントとして、野菜・果物が持つ“チカラ”についてのトークショーやキャベツとはくさいの無償配布等を行った。

【日本栄養士会】

- ・ 8月31日に京都市の同志社女子大学において、「野菜を食べよう2011」を開催し、「生活習慣病予防のための食品の機能の活用～体を守るための賢い野菜の摂りかた～」と題した講演や野菜クイズ等を行った。

- ・ 子供から高齢者まであらゆる世代の食生活支援を目的として作成した「ヘルシーダイアリー」を配布し、栄養相談等を行っている。

- ・ 東日本大震災の被災地において被災者を対象に栄養相談等を行った。

- ・ 放射能問題についての適正な理解を促進するため、消費者への情報提供を行っている。

【青果物健康推進協会】

- ・ 45都府県の小学校で「地元の野菜を知り、野菜博士になろう」のイベントを開催中である。

- ・ 11月16日に、大学生を対象に、筑波大学でセミナー、東京農業大学の学生食堂で鍋の提供を行う。

- ・ 野菜の消費拡大を図るため、乾燥野菜の製造手法、活用方法等を研究するとともに、野菜の新しい食べ方として提案を行う。

- ・ 野菜の新しい価値感をおしゃれに提案している外食店や社員食堂を対象に認定事業を行っている。

【全国青果物商業協同組合連合会】

- ・ 秋口に毎年、市場祭りを開催しているが、今年は「東日本大震災復興支援宣言」を掲げ、各市場にて東日本大震災復興支援フェアを行った。

(4) 放射性物質と食品の安全性について

食品安全委員会事務局新本リスクコミュニケーション官より、以下のとおり説明（資料4）

- ・ 食品安全委員会は、厚生労働省等の関係省庁が提示した数値等に対して、科学的・中立公正な立場からリスク評価を行う機関である。

- ・ ベクレルは、放射能の強さを表す単位で食品や土壌等の検査時に用いられる。シーベルトは、放射線を浴びた時の人体への影響度を示す単位である。ベクレルに実効線量係数（放射性物質の種類、摂取経路、年齢等によって異なる。）をかけることによりシーベルトを算出できる。外

部被ばく、内部被ばく共にシーベルトを用い、健康への影響度を測ることができる。

- ・放射性物質には、物理的半減期、生物学的半減期があり、生物学的半減期は年齢により異なり、高齢になるほど長くなる。

- ・自然放射線から受ける線量は地域差があるが、1人当たりの年間線量（日本平均）は1.5ミリシーベルトであり、食品からも0.41ミリシーベルト相当の線量を受けている。

- ・放射線の人体への影響は、しきい値がある確定的影響としきい値がないと仮定する確率的影響に大別される。放射線による影響として発がんが挙げられるが、発がんはしきい値がないと考えられている。同じ線量を浴びてもがんになる場合とならない場合があり、受ける線量によっても頻度は異なる。

- ・放射性物質による感受性は年齢により異なることから、年代別に摂取量と感受性を考慮して算出し、最も厳しい数値を暫定規制値として全年齢に適用している。

- ・厚生労働省では、より一層の食品の安全と安心を確保するため、来年4月を目途に、許容できる線量を年間1ミリシーベルトに引き下げることを基本として、規制値設定のための検討を進めている。

- ・原発事故発生以降の流通食品由来の年間被ばく線量の推計によると被ばく線量は推計0.1ミリシーベルト程度であり、相当程度小さいものに留まると評価している。

○主な意見等

【青果物健康推進協会】

- ・健康に対する喫煙や飲酒のリスクと野菜摂取不足のリスク等を比較できれば、野菜の消費拡大に役立つのではないかと。

【全国消費者団体連絡会】

- ・食品からの被ばくについて1週間、1か月の献立等をもとに、毎日の食生活に即した数値が示せれば、分かりやすくなるのではないかと。

【野菜と文化のフォーラム】

- ・野菜を1日350g以上食べると仮定すると、年間128kg食べることになるが、500ベクレルの食材を1年間食べ続けるとどれだけの被ばく量になるのか計算方法を知りたい。

【消費科学連合会】

- ・被災地を中心に若い主婦を対象に、放射性物質のリスクコミュニケーションを行っていく必要がある。

(5) その他

現地協議会の開催(資料5)及び平成23年度「野菜セミナー」の開催(資料6)について機構事務局より資料に基づき説明